2026

京都芸術大学

大学院

芸術研究科（通信教育）芸術専攻　修士課程

授業内容紹介［科目概要］

INDEX

スクーリング科目について …… 01

授業科目概要

学際デザイン研究領域 …… 02
コミュニケーションデザイン領域 …… 03
文芸領域 …… 05
芸術学・文化遺産領域 …… 06
写真・映像領域 …… 07
メディアコンテンツ領域　グラフィックアート分野 …… 08
美術・工芸領域　日本画分野 …… 09
美術・工芸領域　洋画分野 …… 10
美術・工芸領域　工芸デザイン分野 …… 11
書画領域 …… 12
専攻共通（全領域） …… 13
自由選択（全領域） …… 15

※本誌に記載の科目は2026年度に開講を予定しているスクーリング科目です（2025年12月現在）。日程が追加・変更となる場合があります。最終的に決定された日程は、入学後に2026年度の各科目のシラバスで確認してください。

スクーリング科目について

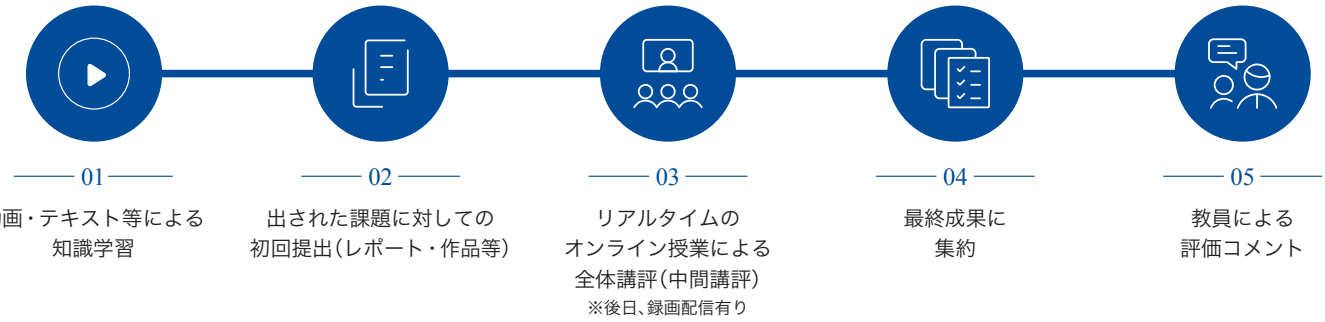
1.学習の流れ

各科目で異なります。主に以下の受講方法があります。次ページ以降の各科目「学習の流れ」の内容と照らし合わせてご確認ください。

専攻共通・分野特論 **動画→初回提出→中間講評→最終提出**

オンデマンド動画教材またはリアルタイムでオンライン授業を受講後、初回提出があります。教員からの全体講評（中間講評）をリアルタイム配信で視聴し、全体講評をふまえて最終成果に集約します。この流れを3か月間（開講期）で履修します。
（一部領域・分野によって履修の流れが異なります）

※オンデマンド動画教材は開講期初（春期4/1～、夏期6/1～、秋期10/1～、冬期1/1～）より視聴ができます。
※リアルタイム配信のオンライン授業は特段の理由がない限り、指定の日時に出席が必須です。



演習・研究科目・研究指導科目 **指定日に授業を受講**

指定日にリアルタイム授業（オンライン・対面）を受講します。演習・研究科目はオンライン（Zoom）、研究指導科目はキャンパス等の会場または、オンライン（Zoom）で受講します。

WS「芸術史講義」（自由選択科目）のみ該当 **動画（15章）・テキスト学習→章末テスト→レポート提出→全体講評**

動画教材とテキストを組み合わせて学習します。全15章の動画を視聴し終えたら、科目によってレポートを提出し、「全体講評」動画を視聴することですべての授業が終了します。レポート試験のボリュームは科目により異なりますが、800～1,600字程度です。

科目により、「春期・秋期」または「夏期・冬期」の開講です。前期（春期・夏期）に履修を開始した科目で単位修得に至らなかった場合は、後期（秋期・冬期）に履修を継続できます。

開講期	春期			夏期			秋期			冬期		
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		レポート	全体講評		レポート	全体講評		レポート	全体講評		レポート	全体講評
		5/21～5/28	6/13～6/20		8/21～8/28	9/13～9/20		11/21～11/28	12/13～12/20		2/21～2/28	3/13～3/20

2.スクーリング開講時間

講時	授業時間
Ⅰ講時	9:30～10:50
Ⅱ講時	11:00～12:20
Ⅲ講時	13:20～14:40
Ⅳ講時	14:50～16:10
Ⅴ講時	16:20～17:40

学際デザイン研究領域

学習はオンデマンドです。リアルタイムの受講は、研究科目（毎月１回は必須）と、演習科目の一部（最終発表会のみ必須）にオンラインでプレゼンテーションと講評が行われます。（入学後に日時をお知らせします）。

科目名	内容	学習の流れ	開講期
学際デザイン特論Ⅰ-1	デザインという概念の変遷を、社会とデザインの関わりや、デザインの歴史からひもとく。また、さまざまなデザイン思考について、その成立の背景およびプロセスを探る。	オンデマンド学習 ↓ 個人ワークまたはグループワーク ↓ グループディスカッション（相互批評・共創） ↓ レポートおよびスライド資料	春期（4～6月）
学際デザイン特論Ⅰ-2	調査法を多面的に取り扱い、研究の基礎として位置づける。具体的な質的調査法・地域デザイン調査法の手法について、課題による実践を通して学ぶ。		夏期（7～9月）
学際デザイン特論Ⅱ-1	伝統文化の定義や日本文化の大きな流れを知るとともに、形式分析や文化的分析など、ものごとのとらえ方について学ぶ。		春期（4～6月）
学際デザイン特論Ⅱ-2	論文の構造をはじめ、文献のリサーチ方法や図書館の利用法、論文の分析方法について学び、今後の研究の基礎とする。		夏期（7～9月）
学際デザイン演習Ⅰ	個人のビジョンを具体化するプロセスを、デザイン思考によって実践。実現したい世界をかたちにするための、ビジュアル思考・プロトタイピング技法を学ぶ。		春～夏期（4～9月）
学際デザイン演習Ⅱ	協働による課題解決のプロセスを、グループワークからデザイン思考によって実践。社会や地域の課題を提案するための力を養う。		秋～冬期（10～3月）
学際デザイン演習Ⅲ	「歴史的景観」や「聖地巡礼（ツーリズム）」を題材に、伝統文化に基づく文化資産を個人でリサーチ。それらを継続・発展させるための思考や議論を行う。		春～夏期（4～9月）
学際デザイン演習Ⅳ	「職人技術の継承」「墓・葬送儀礼」を題材に、伝統文化に基づく文化資産をグループワークでリサーチ。それらを継続・発展させるための思考や議論を行う。		秋～冬期（10～3月）
学際デザイン研究	研究科目は早川ゼミとなり、二つのユニット「社会への観察を起点として問いを立て新しい価値を創造する社会デザインユニット」と「地域を観察し歴史ある対象を文化資産として利活用する方策を創造する地域デザインユニット」からいずれかを選び、グループワークで課題を設定。解決へのプロセスを実践することで、価値の可視化を図る。最終成果物（修士論文）はグループワークによる提案（プレゼンテーション）と、その成果に対する個人の問題意識からの研究活動報告書（4,000字）の2点。		通年

コミュニケーションデザイン領域

科目名	内容	学習の流れ	開講期
コミュニケーションデザイン特論Ⅰ	「コミュニケーションの過去から未来」 急速なメディアの変化によって生み出された、コミュニケーションデザインの考え方。その歴史的背景を紐解きながらコミュニケーションモデルの変革、ソーシャルグッド思考のムーブメントなど、コミュニケーションの時代背景を学ぶ。	<基本の流れ> 導入動画 ↓ 制作アドバイス ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出 ↓ 全体講評 （動画）	春期（4～6月）
コミュニケーションデザイン特論Ⅱ	「コミュニケーションのデザイン手法」 コミュニケーションデザイン戦略はどのように生み出されるのか、コンセンサスブリーフ、インサイト、プロポジションなどの抽出方法や、世界のコミュニケーションデザイン事例を探りながら、優れたアイディアにたどり着く方法論を学ぶ。		春期（4～6月）
コミュニケーションデザイン特論Ⅲ	「社会を見つめるデザインの視点」 それぞれの専門領域において、デザインがどう社会や生活者とつながっているのか、コミュニケーションデザイン戦略や表現がどのように創られているのか、各分野の担当教員が、様々な制作現場における事例と体験談を講義、課題をもとに思考を磨く。 ［ヴィジュアル・コミュニケーションデザイン］ デザインの歴史、近年のグッドデザイン賞の潮流、デザインすることの意味について学ぶ。 ［スペース・コミュニケーションデザイン］ 人々の行動変容を促す空間デザインの変革を様々な角度から理解し、コミュニケーション創出のための場づくりについて学ぶ。 ［映像デザイン分野］ コミュニケーションデザインにおける映像の価値、時代ともに変わり続ける映像コンテンツについて学ぶ。 ［空間デザイン分野］ 人々の行動変容を促す空間デザインの変革を様々な角度から理解し、コミュニティ創出のための場づくりについて学ぶ。		夏期（7～9月）
コミュニケーションデザイン特論Ⅳ	「社会に機能するデザインのカタチ」 各分野の担当教員が、課題（ミッション）の見つけ方やアプローチ、コミュニケーションデザインにおけるストーリーの作り方など、誰をも魅了するアイディアを生み出すまでの、実践的な考え方と手法を講義、課題をもとに表現力を身につける。 ［ヴィジュアル・コミュニケーションデザイン］ 多様な視点を身に付け、ブランドや生活者のストーリーを伝えるためのデザインを可視化する。 ［スペース・コミュニケーションデザイン］ 自然と人の共存というテーマで空間デザインを考え、未成熟な空間領域を対象としたデザイン提案を行う力をつける。 ［映像デザイン分野］ 映像の新しい考え方、創り方を考え、実践し、社会を変える映像の話法を身につける。 ［空間デザイン分野］ 自然と人の共存というテーマで空間デザインを考え、未成熟な空間領域を対象としたデザイン提案を行う力をつける。		夏期（7～9月）

※制作アドバイス、中間講評は原則リアルタイムのオンライン授業です。（後日録画配信もあります。）
※制作アドバイスは「特論Ⅰ・Ⅱ」「特論Ⅲ・Ⅳ」は合同開講です。

科目名	内容	学習の流れ	開講期
コミュニケーション デザイン演習	演習A1「自身の課題を見つける個人ワーク」 各分野、個人ワークで社会問題等をリサーチし、自身の表現テーマやコンセプトを固めることを目的とする。 演習A2「仲間と課題を共有するグループワーク」 分野をまたぎ、グループワークで国内外のコミュニケーションデザインをリサーチ・レポートし、アイディア力を養う。 演習B1「自身の課題をカタチにする個人ワーク」 クリエイティブブリーフィングをもとに、各個人の専門分野で、自身の課題とテーマを具体的な表現に落とし込み表現していく。 演習B2「社会と課題をつなぐグループワーク」 プレゼンテーションに向け、コミュニケーションデザインとそれぞれの分野表現をまとめ、制作し、グループで発表する。	指定日に受講 （5日間）	秋～冬期（10～3月）
コミュニケーション デザイン研究	社会と生活者の関係の中に、課題（ミッション）を抽出し考察、ターゲットインサイトとブランドプロポジションを創出し、コミュニケーションデザイン戦略のもと、各自が自身の領域の中でアイディアをかたちにしていきます。学内でのプレゼンテーション、学会での発表、各デザインコンペへの参加を目標とする。 最終成果物は以下の通り。 ・ケーススタディ ボート（A3×1枚 データ） ・ケーススタディ ビデオ（動画60秒） ・実制作作品のプレゼンテーション ※グループ発表 ・修士論文	指定日に受講 （7日間）	春～秋期（4～12月）

※演習・研究科目のスクーリングはすべてリアルタイムのオンライン授業への出席が必須です。

文芸領域

※指定日にリアルタイムで受講

科目名	内容	学習の流れ	開講期
文芸特論Ⅰ	［小説創作系］ 「教員によるブックリスト（主に純文学系）」をもとに、書くために読み、幅広く学ぶ。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春期（4～6月）
文芸特論Ⅱ	［小説創作系］ 「教員によるブックリスト（主にエンタテインメント小説系）をもとに、書くために読み、幅広く学ぶ。		春期（4～6月）
文芸特論Ⅲ	［小説創作系］ 物語の原理と構造を、映画などの他ジャンルから幅広く学ぶ。		夏期（7～9月）
文芸特論Ⅳ	［小説創作系］ エッセイやコラム、取材記事など非フィクション系のテクスト執筆について学ぶ。		春期（4～6月）
文芸特論Ⅵ	［編集制作系］ 多様なメディア表現に通じる編集と制作の基礎を、実践的に学び、身につける。		夏期（7～9月）
文芸特論Ⅶ	［ことばによるデッサン］ 物語表現において重要な「人物や情景やもの、事柄を視覚的に描く」技術を学ぶ。		秋期（10～12月）

科目名	内容	学習の流れ	開講期
文芸演習	［クリエイティブ・ライティングゼミ］（＊1ゼミ内3グループ制） 文芸領域における物語創作および多様な文章執筆の学びに際して、これらを習得し自らのものとするため、「クリエイティブ・ライティングゼミ」1ゼミの中で3グループに分かれて指導を受ける。通年での持続的指導と創作・制作活動を通じ、幅広い土台作り/基礎固めを行う。また、小説、物語、エッセイ、コラム、論文、紀行文、伝記、自伝、編集制作など多岐にわたる文芸ジャンルについての専門的な学びを、より確かなものとしてゆく。まずは短いテクストに取り組むことなど、ハードルを低くした挑戦から着手しつつ、ひとつのまとまった長さのテクストを最後まで書き抜く「成功体験」を得たうえで、徐々に長いテクストの完成と推敲、社会的な発表をめざす態勢をととのえていく。 文芸領域におけるクリティカル・ライティングおよび編集制作の専門的な学びに際して、これらを習得し自らのものとするため、通年での持続的指導と執筆・制作活動を通じて、幅広い土台作り/基礎固めを行う。また、クリティカル・ライティングおよび編集制作の専門的な学びを、より確かなものとしていく。1年目（演習）は各種テクストの執筆や編集制作における基礎的なワーク、2年目（研究）ではその応用発展篇として社会の中で幅広く生かす術を模索するトレーニングを行う。	指定日に リアルタイムで 受講（9日間）	通年
文芸研究	［クリエイティブ・ライティングゼミ］（＊1ゼミ内3グループ制） 年間を通じ、「修了制作の計画書提出～各種作品の構想～執筆～中間総括～第一稿完成～改稿～修了制作審査および合評」といったプロセスを経て、修了制作の完成までの持続的な指導を受ける。最終成果物（修了制作）は、「作品」と「制作研究ノート」「最終試験（筆記）」の3点。	指定日に リアルタイムで 受講（9日間）	春～秋期（4～12月）

研究指導科目　※指定日にリアルタイムで受講（2日間）

科目名	内容	開講地	開講期
文芸研究指導Ⅰ	ハイフレックス形式（対面または遠隔のいずれかで受講可）にて、創作研究の相互発表をおこない、自身の研究について、そのジャンルの専門家である指導教員から高度なアドバイスを受け、ゆくゆくは社会で通用するレベルにまで力をつけてゆくことを主眼とする。	東京＋遠隔	夏期（7～9月）

芸術学・文化遺産領域

※指定日にリアルタイムで受講

科目名	内容	学習の流れ	開講期
芸術学特論Ⅰ	担当教員の研究内容を反映した講義。芸術学分野の専門的な講義を通じて、各自の視野・知見を広げるとともに、研究テーマの設定、調査・分析、論証の手法を修得する。 ※芸術学分野のみ履修可。4科目から2科目を選択必修。	指定日に受講（2日間） ↓ 初回提出 ↓ 中間講評動画視聴（オンデマンド配信） ↓ 最終提出	秋期（10～12月）
芸術学特論Ⅱ			夏期（7～9月）
芸術学特論Ⅲ			夏期（7～9月）
芸術学特論Ⅳ			夏期（7～9月）
文化遺産特論Ⅰ	担当教員の研究内容を反映した講義。文化遺産分野の専門的な講義を通じて、各自の視野・知見を広げるとともに、研究テーマの設定、調査・分析、論証の手法を修得する。 ※文化遺産分野のみ履修可。4科目から2科目を選択必修。		夏期（7～9月）
文化遺産特論Ⅱ			夏期（7～9月）
文化遺産特論Ⅲ			秋期（10～12月）
文化遺産特論Ⅳ			夏期（7～9月）

科目名	内容	学習の流れ	開講期
芸術文化演習	完全オンラインによるゼミで各自が発表する。研究テーマに関する先行研究を丁寧に振り返り、残された課題の中から問題を提起し、リサーチと分析を繰り返しつつ「中間報告書1・2」を作成して修士論文の準備を万全にする。担当教員の研究指導とオンラインによる院生同士の意見交換によって質の高い研究を目指す。	指定日にリアルタイムで受講（7日間）	春～秋期（4～12月）
芸術文化研究	引き続き完全オンラインでゼミ発表をする。演習科目の研究成果に基づき、リサーチと分析をさらに深め、独自の着眼点で研究テーマを掘り下げる。修士論文の執筆を本格的に開始し、ゼミの研究指導と「中間報告書3・4」のフィードバックをふまえて、その研究を進める。最終成果物（修士論文）は、論文または研究報告書、活動報告書としてまとめ上げる。	指定日にリアルタイムで受講（5日間）	春～秋期（4～12月）

研究指導科目　※指定日にリアルタイムで受講（2日間）

科目名	内容	開講地	開講期
芸術文化研究指導II-1	ハイフレックス形式（対面または遠隔のいずれかで受講可）にておこなうゼミごとの研究発表。自身の研究について、担当教員からさらにアドバイスを受けることで、レギュラークラスの研究を深める。	【芸術学分野】 ［芸術理論・西洋美術史ゼミ］東京＋遠隔 【文化遺産分野】 ［歴史遺産ゼミ］京都＋遠隔 ［芸能史・伝統文化ゼミ］京都＋遠隔	夏期（7～9月）
		【芸術学分野】 ［日本・東洋美術史ゼミ］東京＋遠隔	夏期（7～9月）
芸術文化研究指導II-2	ハイフレックス形式（対面または遠隔のいずれかで受講可）にておこなうゼミごとの研究発表。自身の研究について、担当教員からさらにアドバイスを受けることで、レギュラークラスの研究を深める。	【芸術学分野】 ［芸術理論・西洋美術史ゼミ］東京＋遠隔 ［日本・東洋美術史ゼミ］東京＋遠隔 【文化遺産分野】 ［歴史遺産ゼミ］京都＋遠隔 ［芸能史・伝統文化ゼミ］京都＋遠隔	冬期（1～3月）

写真・映像領域

科目名	内容	学習の流れ	開講期
写真・映像特論Ⅰ	200年に及ぶ歴史を持つ写真映像の多様性と奥深さを体感し、各人に応じた表現や社会との関わりを考えてゆく。特論Ⅰでは19世紀から20世紀にかけての写真映像の流れをたどり、その遺産と記録を紐解きながら個々の可能性を広げていく。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春期(4〜6月)
写真・映像特論Ⅱ	世界各地の写真映像の特徴や時代ごとの表現特性に着目しながら、個々の研究制作をより大きな文脈のなかで再考する。特論Ⅱでは20世紀から21世紀にかけての写真映像の流れを分析し、その核心を導きながら各自の研究制作へ結びつけていく。		夏期(7〜9月)

科目名	内容	学習の流れ	開講期
写真・映像演習	研究報告、作品プレゼンテーション、ライブ講評、個別指導、グループディスカッション等を通して多様な視点を身につけ、自己のテーマの方向性と現実性を絞りこんでいく。ポスト・ベッヒャー派の新たな凝視のスタイルやアメリカのフィクショナル・ドキュメンタリーの手法、デジタル写真と映画の融合といった21世紀写真の新動向をカバーする授業で得られる知見をもとに、自作の肉付けを行い、より実りの多い内容へとふくらませる。	指定日に リアルタイムで 受講 (演習6日間)	通年
写真・映像研究	写真・映像は自発的行為であり、決められたモデルや手本があり、その通りに撮れば良い写真・映像になる訳ではない。写真・映像を撮る理由とは個人に深く根ざした何ものかを揺り動かすことから始まることを忘れないようにしたい。自己の設定したテーマを具体的作品に落としこむ際のさまざまな問題点へしっかり目を向け、テーマの有効性の確認や観賞者の視点の導入、作品タイトルの再考やエッジのつけ方など、ポイントごとにチェックを受けながら最終形の改良を行い、ポートフォリオや論文のかたちで発表する。	指定日に リアルタイムで 受講	通年

研究指導科目　※指定日にリアルタイムで受講

科目名	内容	開講地	開講期
写真・映像研究指導Ⅰ-1	「写真・映像演習」のオンライン合評部分を対面で受講する場合の指定科目。オンラインでは伝わりにくい細かなニュアンスやアドバイスを対面指導で行い、実際のプリントや作品を確認しながら、その展示構成や編集方針に個別に対応していく。	東京	春〜秋期(4〜12月)
写真・映像研究指導Ⅰ-2	「写真・映像研究」のオンライン合評部分を対面で受講する場合の指定科目。オンラインでは伝わりにくい細かなニュアンスやアドバイスを対面指導で行い、実際のプリントや作品を確認しながら、その展示構成や編集方針に個別に対応していく。	東京	春〜秋期(4〜12月)
写真・映像研究指導Ⅰ-3	写真映像の実践実験を訪ねるフォトツアー&エクスカーション。各地で行われる写真祭や写真プロジェクトへの参加、地元の写真家やディレクターによる特別講義、写真美術館や写真文化施設の調査、フィールドワークや実地撮影を通し、実践力と調査力を身につけ、各自の研究制作へ結びつける。	学外	秋期(10〜12月)

メディアコンテンツ領域

グラフィックアート分野

科目名	内容	学習の流れ	開講期
グラフィックアート特論Ⅰ	「グラフィックアートの20世紀」 前世紀の豊穣なグラフィックアートの実験を振り返り、そこで作家たちがどのような課題にどう取り組んだのかを知ることで、今日の制作上の問題意識に役立てる。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	夏期(7〜9月)
グラフィックアート特論Ⅱ	「グラフィックアートの今日的展開」 グラフィックアートの分野で現在まさに生じつつあるさまざまな現象を、その媒体や制作環境の特性との関係を紐解きながら分析する。		秋期(10〜12月)

科目名	内容	学習の流れ	開講期
メディアコンテンツ演習	作品プレゼンテーションやグループディスカッション等を通して多様な視点を身につけ、自己のテーマの方向性と現実性を絞りこんでいく。各自のこれまでの経験で培った表現手法やテーマを振り返りつつ、さらに発想や構想を深めるための実験を繰り返すことで新たな自身の創作を探究する。	指定日に リアルタイムで 受講	通年
メディアコンテンツ研究	修了制作をひとつのポートフォリオにまとめるとともに、創作とその背景、方法についての考察を修士論文としてまとめる。最終成果物はポートフォリオと修士論文の2点。これによって修了後のさらなる活動に向けて、新たな課題発見や目標設定につなげる。		通年

研究指導科目　※指定日にリアルタイムで受講

科目名	内容	開講地	開講期
グラフィックアート研究指導Ⅱ	あらかじめオンライン上で制作中の自作を掲出して相互閲覧をしたうえで、京都・瓜生山キャンパス内での校舎をモチーフにした作品制作と講評会を実施。	京都(予定)	秋期(10〜12月)
グラフィックアート研究指導Ⅲ・Ⅳ	修士1回生2回生の合同授業。ディスカッションやワークショップを通じて制作・研究のブラッシュアップを図る。	東京(予定)	夏期(7〜9月)

美術・工芸領域

日本画分野

科目名	内容	学習の流れ	開講期
日本画特論Ⅰ	「日本画画材から考える作品のシンカ」 筆、膠、顔料といった伝統的な日本画画材についての知識を深め、どのような意図、経緯で作られたものなのか。その工夫を制作に反映させられているかを振り返ると同時に、今後の創作活動への利用したい素材についての提案、検討を行う。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	夏期(7～9月)
日本画特論Ⅱ	「日本画とは何なのか―伝わってきたものは何なのか―」 「日本画」と呼ばれるものは何なのか。その答えを古代の絵画に遡って振り返っていく。古い作品などの紹介や寺院の彩色調査・復元作業を通して、今日の私たちとの絵画や作品との関わり合いを探っていく。		秋期(10～12月)

科目名	内容	学習の流れ	開講期
美術・工芸演習(日本画)	日本画独自の伝統技法を学び、実習を通して、現代に見合った制作技法を思索し、自己の絵画の方向性を模索する。目標を高く定めながらも、常に日本画の基本である写生に立ち戻り、自然の法則に目を凝らしながら絵画に必要な要素を体感、具現化していく。 ※模写による古典技法表現の研究などの専門的な知識も選択可能。	指定日に リアルタイムで 受講(8日間)	通年
美術・工芸研究(日本画)	修了制作作品の完成に向けて、今まで積み重ねてきたものをもとに絵画の幅と深さを追究するとともに、自身を解放し、より自由な表現を実践するための研究を進める。作品密度を上げるために、教員や他学生とのディスカッションを繰り返しながら、内容・材料・技術的な面も強化しつつ修了制作を完成させる。	指定日に リアルタイムで 受講(8日間)	通年

研究指導科目　※指定日に受講(2日間)

科目名	内容	開講地	開講期
日本画研究指導Ⅰ-1	素材研究として麻布、綿布の貼り方の実習と実制作の指導を行う。	京都	春期(4～6月)
日本画研究指導Ⅰ-2	絹本と紙本の裏打ち実習と実制作の指導を行う。	京都	夏期(7～9月)
日本画研究指導Ⅰ-3	素材研究として板の下地作り実習と実制作の指導を行う。	京都	秋期(10～12月)
日本画研究指導Ⅱ-1	素材研究として麻布、綿布の貼り方の実習と修了制作の指導を行う。	京都	春期(4～6月)
日本画研究指導Ⅱ-2	絹本と紙本の裏打ち実習と修了制作の指導を行う。	京都	夏期(7～9月)
日本画研究指導Ⅱ-3	素材研究として板の下地作り実習と修了制作の指導を行う。	京都	秋期(10～12月)

美術・工芸領域

洋画分野

科目名	内容	学習の流れ	開講期
洋画特論Ⅰ	「絵画史」 この時代に生き絵画創作の意義を考えるために必要な絵画史の知識を獲得することを目指した講義。各自が何を創作したいか、実現したい絵画とは何かを考えるために知っておくべき絵画史を学ぶ。西洋美術史、日本美術史を概観し、絵画の役割や成り立ちを考察する。 また、自身の創作を絵画史と対比し創作のテーマや手法について述べる。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春期(4～6月)
洋画特論Ⅱ	「絵画素材」 古代から絵画表現にはさまざまな素材が使われてきた。ここでは創作に使用されてきた素材に着目し、物質的な側面から各自の制作の成り立ちを考察する。現在各自が創作に用いている素材について述べると共に、その特徴と各自の工夫や手法をレポートにまとめる。		夏期(7～9月)

科目名	内容	学習の流れ	開講期
美術・工芸演習(洋画)	各自の制作の立ち位置を探ることから始める。これまでの経験で培った表現手法やテーマを再確認する。さらに発想や構想を深めるためのドローイングや試作を実践し、テーマの確立や展開を目指す。想像の中にあるイメージを具体化させることや表現素材の研究を繰り返すことで新たな自身の創作を探究する。	指定日に リアルタイムで 受講(8日間)	通年
美術・工芸研究(洋画)	修了に向けての創作とその成り立ちについての背景を修士論文としてまとめる。これによって将来に向けての新たな視点の発見や目標設定につなげる。	指定日に リアルタイムで 受講(8日間)	春～秋期(4～12月)

研究指導科目　※指定日に受講(2日間)

科目名	内容	開講地	開講期
洋画研究指導Ⅰ	洋画分野での表現技術を学ぶための素材演習として、水性キャンバス(白亜、石膏等での基底材)の作成と、水性素材、グリザイユ技法等の基礎知識を身につける材料実習。	京都	春期(4～6月)
洋画研究指導Ⅱ	自主制作を進める中での問題点の解決と、テーマの発見や探究に関わる指導をおこなう。作品を持参しての講評と、作品(エスキース等を含む)の方向性や考え方について、大学での制作を通して指導する。	京都	冬期(1～3月)
洋画研究指導Ⅲ	主に修士作品(エスキースを含む)の制作指導を行う。修士作品(エスキースを含む)の中間講評と具体的な制作指導を行う。	京都	春期(4～6月)
洋画研究指導Ⅳ	修士作品の仕上げに向けての指導と修了後の発信やポートフォリオのまとめ方などプレゼン方法の指導。	京都	秋期(10～12月)

美術・工芸領域

工芸デザイン分野

科目名	内容	学習の流れ	開講期
工芸デザイン特論Ⅰ	「工芸をほぐす」 既存の工芸観をときほぐし、社会的・心理的な切り口等も含めて「作って暮らす」ことの意義を再考する。さまざまな活動や制作現場の動画視聴、双方向の討議を経て学びを深める。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ※指定日に受講 ↓ 最終提出	春期(4～6月)
工芸デザイン特論Ⅱ	「工芸をほりさげる」 柔軟な視野を基盤にしたうえで、それぞれの素材や地域に即した手工のあり方を模索する。各地の情報が集まるオンライン学習環境のメリットを活かし学生間での交流や、地域密着・地域発信型の動画教材を活用する。		秋期(10～12月)

科目名	内容	学習の流れ	開講期
美術・工芸演習 (工芸デザイン)	「素材と技術の体験」 オンライン授業における素材体験を補うための基礎課題。共通素材の加工体験のほか、お気に入りの素材を用いた小品を学生間で交換して相互批評などを通して、素材への向き合い方、生活への取り込み方を学ぶ。 「グループディスカッション」 工芸デザインへの思考を深めるにはリサーチは欠かせない。日本各地にある優れたモノ(伝統工芸、民芸品、手芸、雑貨、道具、民具、祭事品等)へのまなざしを鍛え、グループディスカッションを通して語る方法を身につける。 「思考の飛躍、再構築」 ともすれば「こだわりの」「職人気質の」思考へと先鋭化しやすい工芸制作のあり方を再検討し、身の回りの工芸「的」なものも含めて対象にしたリサーチ課題、およびその相互検証を行う。 「社会との接点」 少量生産品ならではのメッセージの発信方法やブランディング、販売等について、実践経験を持つ講師によるオンラインレクチャーを視聴し、自身の活動力の素地を養う。	指定日に受講 (演習10日間)	通年
美術・工芸研究 (工芸デザイン)	「工芸デザインの新たな地平へ」 これまでに得た情報や知識をもとに自らの研究テーマを定め、研究・制作を深める。「制作主体」「研究主体」のいずれかを選択し、教員や他学生とのディスカッションを繰り返しながら、深さと広さを兼ね備えた工芸デザインの発信力の獲得を目指す。	指定日に受講 (演習9日間)	通年

研究指導科目　※指定日に受講(2日間)

科目名	内容	開講地	開講期
工芸デザイン研究指導Ⅰ	現地研修(対面／施設見学と植物染め体験) 「武田薬品京都薬用植物園」での見学と、身近にある素材の加工法を通して、考察したことを作品とともに発表する。また、京都市内で活躍する作家・工房・ギャラリーを見学し、自身の卒業後の活動にどのように活かせそうか考察する(授業後レポートあり)。	京都	春期(4～6月)
工芸デザイン研究指導Ⅱ	現地研修(対面／施設見学と東北希少工芸材体験) 東北の希少工芸材の一つ「埋もれ木」の素材感に触れ、地域的・時代的背景や魅力の伝え方等について考え、発表する。また、地域の文化事業を牽引してきたせんだいメディアテークのこれまでの活動から、地域アーカイブについて考察する。	仙台	夏期(7～9月)

書画領域

科目名	内容	学習の流れ	開講期
書画特論Ⅰ	様々な場で活躍する作家や研究者を招き、そこでの表現活動、作家論、また研究に触れることで、自己の表現を拡張する実践的な学びを深めていく。 開講期には、作家や研究者などを招いてのリアルタイムでの講義を予定し質疑応答などを含めた双方向型の授業を行います。履修期間に、それら開講期の動画をオンデマンド視聴とし、リアルタイム講義に参加できなくても、履修できる内容になっています。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春～秋期（4～12月）
書画特論Ⅱ	書と画における表現の歴史や、造形・文化論などの講義を通して、自己の表現を支える知識や理論の獲得を目指していく。 開講期には、作家や研究者などを招いてのリアルタイムでの講義を予定し質疑応答などを含めた双方向型の授業を行う。履修期間に、それら開講期の動画をオンデマンド視聴とし、リアルタイム講義に参加不可でも、履修可能な内容である。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春～秋期（4～12月）
書画演習	書と画の表現領域を横断するかたちで演習的に様々な素材や技法についての経験を積むことで、表現の枠組みの拡張、統合を行う。書と画に共通するテーマや課題に向き合いながら、表現力や構想力を鍛え、自己の研究テーマや課題を確認し、次の研究科目での発展や応用を目指していく。	指定日に リアルタイムでの 受講	春～秋期（4～12月）
書画研究	書と画でゼミに分かれて、自身の制作や研究テーマを深化させていく。それぞれの制作や研究テーマ、研究論文の内容や方向性を確認し、その実現化に向けて、研究報告やプレゼンテーション、講評、ディスカッションを行っていく。最終成果物として、修了制作と論文の作成を行う。	指定日に リアルタイムでの 受講	2027年度より開講 （予定）
書画研究指導Ⅰ	研究指導科目では鑑賞や美的体験をテーマに、書画の歴史や文化を掘り下げるために、全国の施設や遺産などへ実際に赴き、対象へむけての観察眼、表現に対しての体験的理解、創造性を養う。書画研究指導Ⅰでは、事前学習として動画講義をオンデマンドで受講し、その上で日本の古碑を巡る体験として、宮城県の多賀城に出向いての散策や奈良時代の書となる多賀城碑を見学予定。2日目は自由参加とし、多賀城に隣接する東北歴史博物館を見学予定。	講義を オンデマンド 視聴の上、 指定日に リアルタイムでの 受講	秋期（10～12月）
書画研究指導Ⅱ	研究指導科目では鑑賞や美的体験をテーマに、書画の歴史や文化を掘り下げるために、全国の施設や遺産などへ実際に赴き、対象へむけての観察眼、表現に対しての体験的理解、創造性を養う。書画研究指導Ⅱでは、近畿・京都を中心に書・画のミュージアムを研究旅行し、美の探訪を行う予定。	指定日に リアルタイムでの 受講	2027年度より開講 （予定）

専攻共通（全領域）

科目名	内容	学習の流れ	開講期
芸術文化論特論Ⅰ	日本の芸術文化を広い視野から概観するとともに、大学院生の問題意識の共有化を図ることを意図した必修科目である。とりわけ京都の芸術文化に関するテーマを取り上げて、様々な時代・ジャンルを越えた主題を中心に講じていく。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	春期（4～6月）・ 秋期（10～12月）
芸術文化論特論Ⅱ	制作や受容、また教育にかかわる芸術制度は近代以降も地域やジャンルによってさまざまなありようを示している。本科目では、日本でデザイン制作やクリエイティヴな活動に携わる学生が、現在活動中のデザイナーや作家の例を参考にしつつ自らの置かれた制作環境の成立過程を振り返り、そのなかで今後どのように自らの制作研究の意義を見定めてゆくかを考察する。		夏期（7～9月）・ 冬期（1～3月）

※芸術文化論特論Ⅰ・Ⅱについてはリアルタイム配信の中間講評はありません。
　開講期内の指定期間に中間講評動画の配信がありますので、そちらを視聴してください。

科目名	内容	学習の流れ	開講期
芸術環境原論Ⅰ	【サスティナブルデザイン論】 デザイン研究において今日避けて通れないテーマとして、サスティナブルデザインがある。サスティナブルデザインを「人と環境に配慮したモノや社会システムの創出活動」かつ「社会の発展と調和した活動」と定義し、その基本的な構成要素を学ぶ。	＜基本の流れ＞ 動画視聴または 指定日に受講 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 動画視聴または 指定日に受講 ↓ 最終提出	入学後にお知らせします （必修科目ではありません）
芸術環境原論Ⅱ	【建築と都市空間】 さまざまな建築空間の事例に学びつつ、都市や地域の情報抽出とその表現という作業を通じて、自然環境や社会的な関係、また歴史の厚みや生活の中で経験される様々な感覚を空間的に表現し、環境として構想する力を獲得する。		
芸術環境原論Ⅲ	【地域と文化創生】 文化創生のための方法は、各地の風土や社会的条件といったさまざまな環境によって適切なものをその場で構築していかなくてはならない。本科目では、さまざまな事例を紹介しつつ、現場から何をリサーチし何を糸口にして地域文化をデザインするのかを考察する。		
芸術環境原論Ⅳ	【メディアコンテンツ論】 従来、マンガ、アニメ、ドラマといったジャンルは大衆文化として括られ、絵画や彫刻、オペラといった社会的に評価を確立した芸術ジャンルとは受容者層も制作者層も異にしているとみなされてきた。しかし昨今の芸術をめぐる環境は大きく変わり、本科目でも、そうした区分にとらわれないメディアコンテンツのもたらす新たな文化情況について考察する。		
芸術環境原論Ⅴ	【芸術の場所論】 本科目では、芸術活動における場所性の問題を考察する。古代以来、今日まで、芸術活動がどのように土地を表現してきたのか、またそれがどのような複合的な要請に応えるものだったのかを、主に建築や庭園を例にとりつつ考察する。		
芸術環境原論Ⅵ	【工芸デザイン論】 ウィリアム・モリスの活動を起点とする近代工芸運動、デザイン運動は、18世紀半ばにイギリスで始まった産業革命以降の社会を背景として展開された。近代デザイン史の上では「工芸」から「デザイン」へという大きな流れとして捉えられるこの展開を、本講義では「工芸」の側から捉え直し、これらの領域における現代の課題、問題を探っていきたい。		

科目名	内容	学習の流れ	開講期
制作行為原論Ⅰ	【配信の時代の著作権】 今日、芸術作品の受容が最も頻繁に行われているのは放送やインターネット上であろう。そこでは従来の展示や出版には見られなかったさまざまな著作権上の問題が生じているが、それらの問題が何を制作にもたらすのかを実例に沿いつつ論ずる。	動画 ↓ 初回提出 ↓ 中間講評 ↓ 最終提出	秋期(10～12月)
制作行為原論Ⅱ	【絵画技法材料学】 絵画を網膜的な画像として見るだけではなく、それを支える物質的な基盤としての顔料、定着剤、支持体といったものに注目し、それらがいかにして人間の芸術的感性や表現と関わるのかを考察する。		春期(4～6月)
制作行為原論Ⅲ	【AIと芸術制作】 AI(人工知能)の近年の進歩は著しく、AIが芸術の領域でもさまざまに用いられているようになってきた。本科目ではAIと芸術について、AIをどのように制作に利用するかという問題だけでなく、AIがどのように人間の創造性について問題提起をするのかという点を考察する。		秋期(10～12月)
制作行為原論Ⅳ	【演劇論】 演劇はきわめて古く、かつ広汎に認められる芸術活動であるが、本科目では演劇の持つ特有の構造とその効果について、比較的最近の演劇作品とその上演の実例をもとに講ずる。		冬期(1～3月)
制作行為原論Ⅴ	【パーソナルメディア論】 今日、職業的な作家でない個人の制作活動がかつてなく盛んになっている。従来の芸術享受のありかたにとどまらず、コミュニケーションの契機ともなっている映像、音楽、文章の制作やそれを共有する行為の意味を論ずる。		夏期(7～9月)
制作行為原論Ⅵ	【古典文化とその再生】 古典文化は時代とともに変化と再生のプロセスを繰り返してきた。この科目では、伝統芸能を軸に古典文化が近現代のさまざまなメディアのなかでどのようにそのあり方を変え、時代に適応しようとしてきたのかをさまざまな事例を示しながら考える。それにより、古典文化を取り巻く今日的な課題と未来について考えを深めたい。		夏期(7～9月)

※専攻共通科目の中間講評は後日録画配信があります。
　分野特論、演習・研究科目の開講日時と重なった場合は、分野特論、演習・研究科目への出席を優先してください。

自由選択（全領域）

科目名	内容	学習の流れ	開講期
芸術史講義（日本）1	日本の造形芸術について、その成立から平安時代、鎌倉時代を中心に学ぶ。	動画視聴＋テキスト学習 ↓ 章末テスト ↓ レポート提出 ↓ 全体講評 ※リアルタイムでの受講は不要。	春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（日本）2	日本の造形芸術について、近世および近代の絵画・工芸を中心に学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（日本）3	日本の文学、芸能、音楽の古代から近世に至るまでの流れを辿る。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（日本）4	江戸時代から明治期に至るまでの文学、歌舞伎、話芸、民俗芸能について学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（アジア）1	中国の古代から明清時代に至るまでの芸術史を学ぶ。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（アジア）2	朝鮮半島、西アジア、中央アジア、インドなどアジア各地の芸術史を学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（アジア）3	中国の文学、音楽、舞台芸術について、古代から19世紀までの流れを学ぶ。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（アジア）4	朝鮮半島、インド、東南アジアの文学、上演芸術について学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（ヨーロッパ）1	ヨーロッパの造形芸術の成立から盛期ルネサンスまでの展開を理解する。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（ヨーロッパ）2	盛期ルネサンスから20世紀はじめまでの造形芸術の歴史を辿る。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（ヨーロッパ）3	ヨーロッパの文学、音楽、舞台の歴史を古代ギリシアから18世紀まで辿る。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（ヨーロッパ）4	18世紀・19世紀のヨーロッパ諸国の上演芸術作品の諸潮流を学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（近現代）1	20世紀初頭から21世紀まで、特に欧米での造形芸術の流れを学ぶ。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（近現代）2	アジアやアフリカなどの動向や建築、写真、ファッションなどの歴史を学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）
芸術史講義（近現代）3	19世紀末からの文学、舞台芸術の流れを社会の動きとあわせて学ぶ。		春期（4～6月）・秋期（10～12月）
芸術史講義（近現代）4	近現代の欧米とアジアの音楽、映画そしてサブカルチャーの変遷を学ぶ。		夏期（7～9月）・冬期（1～3月）

※「芸術史講義」は修了要件の単位数には含まれません。

（芸術学・文化遺産領域のみ履修可）

科目名	内容	学習の流れ	開講期
論文研究基礎	論文執筆にあたって必要な、参考文献の探し方、専門的な辞書類の活用方法や図書館の利用方法など、各自の文献検索に資する情報をガイダンスする。その上でグループ討議などを通じて、先行研究に対する客観的批判力を養う。 ※いずれか1つの日程を選択し、受講してください。	動画視聴＋事前課題提出 ↓ 指定日に受講（1日間） ↓ レポート提出	通年

※「論文研究基礎」は修了要件の単位数には含まれません。